

第 36 回クラシックを楽しむ会

2016 年 9 月 18 日（日）18:00～（2 時間 40 分、休憩除く）

タイトル：**歌劇「カルメン」(ビゼー)** 2013 年 10 月の再上映

会場等：オランジュ音楽祭（2004 年 8 月 3 日）
フランス、オランジュ古代ローマ劇場

楽団等：フランス放送フィルハーモニー管弦楽団、
ニース歌劇場合唱団、ツーロン歌劇場合唱団
アヴィニョン歌劇場合唱団、同バレエ団、オランジュ
音楽祭合唱団、ブーシュ・デュ・ローヌ少年少女聖歌隊

指揮：チョン・ミョンフン

演出：ジェローム・サヴァリ

出演：カルメン：ベアトリス・ウリア・モンゾン
ホセ：ロベルト・アラニーヤ
ミカエラ：ノラ・アンセレン
エスカミーリョ：リュドヴィク・デジエ



ホセ最後の懇願を拒絶するカルメン

ものがたり

舞台は 1820 年頃スペインのセビリア。たばこ工場の女工カルメンが伍長のホセを誘惑して悪の道に引きずり込む。自由奔放なカルメンは自分の性格を変えず強い意思を貫き通す。純情で真面目な田舎者のホセは優柔不断。カルメンを一途に愛し誘惑に負けて身を持ち崩す。心移りしたカルメンはホセ最後の懇願を強い意志で拒絶し刺される。

みどころ聴きどころ

カルメンの歌う**ハバネラ**「恋は野の花」、**セギディーリア**「セビリアの城壁の近くに」、**ジプシーの歌**「賑やかな楽の調べ」。エスカミーリョの歌う**闘牛士の歌**「諸君の乾杯を喜んで受けよう」。ホセの歌う**花の歌**「お前が投げたこの花は」。ミカエラの**アリア**「何も恐れるものはない」など新鮮で魅力的な歌が満載。**前奏曲**と各**間奏曲**もそれぞれ名曲で、カルメン第 1 組曲としても楽しめる。

オランジュ音楽祭とその舞台

オランジュ音楽祭はフランス南部プロヴァンス地方のオランジュ（英語：オレンジ）で毎年 8 月に開かれるオペラ音楽祭。会場は世界遺産の古代ローマ劇場で、幅 103m の広い舞台、背後に巨石を積み上げた高さ 36m の壮大な石壁。観客席は 8,500 人収容可能。なお、オランジュの近くにはアヴィニョン、アルルなど古代ローマ遺跡が多い。



オランジュ古代ローマ劇場

第 37 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：**歌劇「ナブッコ」(ヴェルディ)**

10 月 23 日（日）17 時 30 分開場、18 時上映開始

旧約聖書を題材に愛国的な情熱に満ちたオペラ。合唱曲「**行け、わが想いよ、黄金の翼にのって**」は初演当時オーストリア支配下で苦しんでいたイタリア民衆を勇気づけ、今も第二の国歌として愛唱されている名曲。

11 月以降、「真珠採り」、「ドン・ジョバンニ」、「トゥーランドット」などを予定。

あらすじ

【時と場所】

1820年頃、スペイン南部のセビリア

【主要人物】

カルメン(Ms)	ジプシーの女
ドン・ホセ(T)	衛兵の伍長（アルカラの竜騎兵）
エスカミーリョ(Br)	グラナダの闘牛士、セビリアに来ている
ミカエラ(S)	ホセの故郷の許嫁

【第1幕】セビリアのタバコ工場前の広間

昼休みになり、女工たちがタバコ工場から出てくる。ジプシーのカルメンは**ハバネラ**「恋は野の花」を歌って彼女目当てに集まった男たちを魅了するが、衛兵の伍長ドン・ホセだけは興味を示さない。そこでカルメンは胸に付けていたカシーの花をホセに投げつけて去っていく。

工場に戻ったカルメンは女工たちと喧嘩騒ぎを起こして捕らえられるが、**セギディーリャ**「セビリアの城壁の近くに」を歌って護送役のホセを誘惑し、手縄をゆるめさせて逃げ去る。

【第2幕】セビリアの街外れ、砦近くの居酒屋

2か月後の夜、居酒屋はカルメンの**ジプシーの歌**で盛り上がっている。闘牛士達が現れ、闘牛士エスカミーリョが**闘牛士の歌**を歌った後、カルメンに言い寄るが、カルメンは相手にしない。カルメンを逃がした罪で刑務所に入っていたホセが釈放され、閉店後の酒場にいるカルメンに会いにくる。ホセは彼女からもらった花を手に**花の歌**を歌って愛を告白。カルメンは、本当に愛しているならすべてを捨ててジプシー仲間と自由に暮らすよう要求。ホセは迷うが、やむを得ない事態になり脱走兵として彼らの仲間に加わる。

【第3幕】深夜の陰しい山中、密輸業者達の根城

ホセはカルメン達の仲間が密輸業者と知って後悔し、カルメンはホセに愛想を尽かしてエスカミーリョに心移している。

ホセを訪ねてきた許嫁**ミカエラ**は**アリア**を歌いホセを取り戻す勇気を神に祈る。ミカエラからホセの母が危篤だと知らされたホセはカルメンに未練を残しながらも山を下りて故郷に帰ることにする。

【第4幕】セビリアの闘牛場前の広場

群衆たちでにぎわう広場。今日は闘牛の日。闘牛士たちに続き、エスカミーリョとカルメンと一緒に現れる。広場に残ったカルメンは落ちぶれたホセに出会う。ホセはやり直そうと懇願するがカルメンは相手にしない。しつこく食い下がるホセに、カルメンは昔もらった指輪を投げつける。激昂したホセはカルメンを刺し殺し、倒れた彼女に身を投げて「僕が殺した・・・僕の大事なカルメン！」と叫ぶ。

参考. カルメン組曲と歌劇中の対応（フリッツ・ホフマンの選曲・編曲）*演奏により曲目、曲順が異なる

第1組曲（前奏曲と間奏曲を中心に構成）

前奏曲	（第1幕への前奏曲の後半部分）	
アラゴネーズ	（第4幕への間奏曲）	アラゴン地方の踊り
間奏曲	（第3幕への間奏曲）	牧歌的なフルートのメロディー
セギディーリャ		第1幕、カルメンがホセを誘惑するアリア
アルカラの竜騎兵	（第2幕への間奏曲）	ファゴットの素朴なメロディー、ホセが口ずさむ歌から
トレアドール（闘牛士）	（第1幕への前奏曲の前半部分）	第4幕の冒頭、闘牛士入場の行進

第2組曲（アリアや合唱入りの曲をオーケストラ用に編曲）

密輸入者の行進		第3幕の冒頭、暗闇の中を密輸入者が静かに行進
ハバネラ	（カルメンのアリア）	第1幕、恋は野の鳥～私が好きになったら用心
夜想曲	（ミカエラのアリア）	第3幕、ホルンの序奏に続きミカエラの決意を優美に歌う
闘牛士の歌	（エスカミーリョのアリア）	第2幕、諸君らの乾杯を喜んで受けよう
衛兵の交代	（子どもたちの合唱）	第1幕、衛兵の交代を子供たちが真似する
ジプシーの踊り		第2幕、カルメンが仲間たちと踊り歌う、トララララ...

ホセ役ロベルト・アラニーヤ

フランスの国民的テノール歌手ロベルト・アラニーヤ(1963-)はイタリア系フランス人。音楽の専門教育は受けてなくパリの観光客向けナイトクラブで歌っていた頃オペラ歌手を志す。パヴァロッティ声楽コンクールで優勝して一躍有名になり現在世界最高のテノール歌手の一人。美しいフランス語、太陽の声と称される明るく輝く声、抒情的で心のこもった表現力でフランスオペラには欠かせない存在。

なお、カルメン役メゾソプラノのフランス生まれ同年のベアトリス・ウリア・モンゾン(1963-)とは現在も共演を重ねている。



アラニーヤ

歌劇「カルメン」誕生の経緯

ジョルジュ・ビゼーは劇音楽に才能を発揮し組曲「アルルの女」が好評だった1872年、パリのオペラ・コミック座から歌劇の作曲を依頼された。ビゼーはメリメの短編小説「カルメン」を題材に選び妻の従兄リュドヴィック・アレヴィとアンリ・メイヤックに台本を依頼するとともに作曲を開始。しかし題材は公序良俗に反するもの。劇場側は健全な社交場に相応しくなく台本の改変を迫る。紆余曲折を経て完成した作品は原作をより普遍的にし、1975年3月の初演は成功を予感させる。初演の3か月後ビゼーは36歳の若さで急死。しかしその半年後にウィーンで大成功を収める。素晴らしい音楽とともに不滅の名作となる。

ビゼーの名曲は「カルメン」だけではない

ジョルジュ・ビゼー(1838年-1875年)は9歳からパリ音楽院に学び、19歳でローマ賞※を受賞して歌劇に意欲を燃やしたが生前はあまり認められなかった。ピアノの才能はリストを驚嘆・称賛させた。死後「カルメン」の輝かしい成功の結果、組曲で有名な劇付随音楽「アルルの女」、歌劇「真珠探り」などが再評価され、17歳で作曲した交響曲八長調は現在も広く親しまれている。

※フランス国家の奨学金付留学制度。



ビゼー

原作者はプロスペル・メリメ

プロスペル・メリメ(1803年-1870年)は、フランスの作家、歴史家、考古学者、官吏。パリのブルジョワ出身で法学を修めて弁護士・官吏になり、フランスの歴史記念物監督官として、オランジュ古代ローマ劇場を含む多くの歴史的建造物を修復・保護。第2帝政の皇帝ナポレオン3世の側近として出世、元老院議員にまでなった。

小説「カルメン」は、1830年27歳で最初のスペイン旅行中の見聞や、旅行中に知り合い「手厚い歓待」を受けたティーバ伯爵夫人(後にモンティホ伯爵夫人)から聞いた話などが材料。なお、彼女の次女ウージェニーはナポレオン3世の妃になったが、メリメと共に伯爵夫人と「交流」のあったアレクサンドル・デュマ・フィス等がこの縁談をバックアップした。



メリメ

原作・台本の花はバラではなくカシーの花

歌劇のカルメンは口の端にくわえた赤いバラの花をホセに投げつける。実は、原作も台本もバラではなくカシー(アカシア※1)の花。ミモザ※2に似た強い香りの小さな丸い黄色の花。メリメがなぜこの花を用いたのかは永井典克の「メリメ作品中の花」が詳しい。原作執筆当時バラはまだ一般的ではなく品種改良を重ねて大衆化したのは20世紀初頭。情熱的なカルメンと赤いバラのイメージが結びついたのは「カルメン」が次つぎに映画化され普及した影響らしい。

※1. 白蝶形花のニセアカシアをアカシアと呼ぶことがあるが全くの別物。

※2. ミモザの原義はオジキソウ属。アカシア属のフサアカシア等を一般にミモザと呼ぶ。



カシーの花

ハバネラ「恋は野の花」誕生の経緯

「カルメン」初演で主演を演じたセレスティーヌ・ガリ・マリエ(1837-1905)はビゼーが最初に作曲した「恋はロマの子」が気に入らず、何度も書き直しを要求。悩んだビゼーは、カルメンのモデルとされ、小説家、女優、歌手、劇場監督、支配人として成功した高級娼婦のセレスト・モガドール(1824-1909)のサロンに入り浸っていた 27 歳の頃、41 歳の彼女が歌っていたハバネラ「エルアグリート」を思い出して流用。書き直しを重ね、自ら作詞して「恋は野の鳥」を完成させた。

注. この経緯はNHKEテレの「らららクラシック」でも2014年8月に紹介された。



高級娼婦モガドール



初演時の主演ガリ・マリエ

ハバネラはキューバの民族舞曲

ビゼーはハバネラをスペイン民族舞曲と思っていたが、流用した「エルアグリート」はスペインの音楽家セバスティアン・イラディエル(1809-1865)がキューバの民族舞曲ハバネラのリズムで作曲した作品。ハバネラ(ハバナの踊り)は船乗り達がスペインに伝えてヨーロッパに広まった。なお、イラディエルがキューバ訪問後の1860年頃に作曲した代表作のハバネラ「ラ・パロマ」はラテン音楽の名曲として世界的に大ヒット、ハバネラはフランスのサロンでも歌われていてビゼーが知ることになった。

参考. ユーチューブに"El Arreglito"を入力するとイラディエルの原曲を聴くことができる。同様にお馴染みの「ラ・パロマ」も色々な楽団、奏者、歌手で楽しめる。



イラディエル

1820年頃という時代背景

スペイン立憲革命と「自由主義の三年間」(1820-1823)

半島戦争(1808-1814)と呼ばれるナポレオン支配に対する独立戦争に続き、絶対王政復活に反対して自由主義者らが反乱、1820年**スペイン立憲革命**を起こして自由主義政府を樹立させた。革命の波及を恐れた隣国フランスや神聖同盟諸国による干渉で1823年に革命は頓挫し、その後の3年間は恐怖政治が続いた。なお、この間に中南米各地のスペイン植民地で独立戦争が起き、メキシコ、ペルーなどの諸国が独立した。

右の絵画は宮廷画家辞任前のゴヤ(1746-1828)1814年の作品。1808年に起きたマドリード市民の武装蜂起をフランス軍が弾圧したが、反乱は全国に広がりフランス軍は敗退した。

補足. ナポレオンは1814年エルバ島に流され、翌年ワーテルローで敗れてセントヘレナ島に流され1821年に亡くなった。



ゴヤ最高の名画の一つ「マドリード、1808年5月3日」